

新学習指導要領における思考力、判断力、表現力の評価について

教職員支援機構
大杉昭英

1 発表のポイント

新学習指導要領が示され、児童生徒の学びの改善を実現する各教科の指導の方向性が明らかになった。「指導と評価の一体化」の観点から考えると、この指導の方向性と一致する学習評価が求められている。そこで、ここでは、まず、児童生徒の学びの改善を実現する各教科の指導の方向性を確認した上で、評価の考え方について意見を述べることにしたい。

2 児童生徒の学びの改善を実現する各教科の指導の方向性

思考力、判断力、表現力等の育成に焦点を置いて、児童生徒の学びの改善を簡潔に述べるとするならば、各教科の特質に応じて、見方・考え方を働かせ、知識・技能を活用する中で考えたり判断したり表現したりする学びを充実させるということになる。

この学びの改善をモデル化するならば、児童生徒が分からない、できない「問い」と「答え」をつなぐプロセスが学習活動になる、というものが考えられる。

学習指導要領解説総則編では、このような学習活動において、思考・判断・表現の過程には次の3つがあるとされている。

- ・ 物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程
- ・ 精査した情報を基に自分の考えを形成し表現したり、目的や状況等に応じて互いの考えを伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程
- ・ 思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程

3 資質・能力を育成するキーワードとなる見方・考え方の分類

このように児童生徒の学びの改善に見方・考え方が大きな働きをするのだが、各教科では、その特質に応じて見方・考え方が定義されている。そこで、ここでは、各教科の見方・考え方の特徴を整理することにした。

いずれの教科においても基本的には、思考・判断・表現の対象を明らかにし、どのように思考・判断・表現するかを示しているのだが、あえて分類すると大きく2つに分かれると考えられる。

第1が、「プロセス、手続き型」であり、学習活動において思考・判断・表現するプロセスや手続きを、見方・考え方を働かせた状態として捉えているものである。

第2が、「概念的枠組み型」であり、概念や理論という枠組みで事象を捉え、それをを用いて考え、判断し、表現する活動を見方・考え方を働かせた状態として捉えているものである。

4 評価の考え方と課題

(1) 「プロセス、手続き型」

「プロセス、手続き型」では、例えば、「問い」を追究する学習活動において、追究プロセス、手続きに沿って答え（作品等）を導き出し、その導出過程と結論を説明できたか

どうかで評価することになる。

ここで、課題として考えられるのは、どのような知識・技能が活用されるかで思考・判断・表現の質が決まる。換言すれば、常識的な知識や簡単な技能を活用して考え、判断、表現した場合でも、思考力、判断力、表現力が育まれていると評価できるかということである。

(2) 「概念的枠組み型」

「概念的枠組み型」では、例えば、「問い」を追究する学習活動においては、問題を概念的枠組み（理論）で捉え、因果的説明の枠組みとしての理論に基づいて答え（解決策）を演繹的に導き出し、その導出過程と結論を説明できたかどうかで評価することになる。

ここで、課題として考えられるのは、追究の際に活用される理論は年齢によっては習得が困難であり、実際、小学校では扱われる理論は各教科でそれほど多くはないため、この型の見方・考え方では、資質・能力を育成する学習機会を十分に保障できないということになる。

(3) 「知識・技能」と「思考力、判断力、表現力」との関連

「問い」と「答え」をつなぐ学習活動という観点から考えると、「問題」を追究する際に、問題に関する状況についての知識がないと、問題の意味そのものが分からず追究することができないのではないか。その意味で、「思考力、判断力、表現力」の評価に当たっては、①問題・課題の状況に関する知識・技能の習得の確認、②答え（作品）を導き出すために必要な質の高い知識・技能の習得の確認、③質の高い知識・技能を活用して答え（作品）を導き出すことができたかを確認するという三つの確認テストが必要ではないか。

（テスト作成に当たっては、イモズル式の問題として批判もあるが）

(4) 定まった答えのある問題と定まった答えのない問題の違い

同じく、「問い」と「答え」をつなぐ学習活動という観点から考えたとき、「問い」には2種類あることに留意すべきである。第1は、既に定まった答えのある「問い」である。定まった1つの答えがある問題を追究する場合、答えを導き出す手続きとともに、考えて導き出した答えが正しいかどうかが最終的な評価のポイントとなる。

第2は、答えが定まっていない「問い」である。まだ定まった答えのない問題を追究する場合、答えを導き出す手続きと自分が出した答えの妥当性を考え、説明できるかが評価のポイントとなる。

この2つの「問い」の違いは、科学的实在論と社会構成主義の考え方によって説明できる。「科学的实在論」は、簡単に言うと、人間の認識活動とは独立の世界があつて、その世界はあらかじめ構造と秩序をもっており、われわれは、それを知る（発見する）ことができる、というものである。定まった1つの答えがある問題を追究するというのは、あらかじめ客観的な構造、秩序（答え）が存在しており、それを一定の手続きによって発見する活動とも言えるだろう。

一方、「社会構成主義」の考え方は、簡単に言うと、あらかじめ世界の構造とか秩序があるのではなく、それは認識主観（人間と考えられる）が構成して世界に押しつけるものであり、社会が変われば、構造も秩序も変わる、というものである。まだ定まった答えのない問題を追究するというのは、われわれ自身が一定の手続きによって構造、秩序（答え）を構成（あるいは構築）する活動（答えをつくりだす活動）とも言えるだろう。

とりわけ、児童生徒にとって、まだ定まった答えのない問題を追究する学習活動はそれほど体験したことは多くないと考えられる。学期末や年度末に各教科の様々な領域で学んだ知識・技能を組み合わせることで追究し答えをつくりあげる力を評価するための「大きな問題」を考える必要があるのではないか。

(5) その他

最後に、その他として、思考力、判断力、表現力を見取る良問をストック・公開する必要があるのではないだろうか。

(＊科学的实在論と社会構成主義については、戸田山和久『科学哲学の冒険－サイエンスの目的と方法をさぐる－』NHKブックスを参照)

【参考：中学校における各教科の「見方・考え方」に関する記述】

○国語

言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため、「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成をめざす資質・能力をよりよく身に付けることにつながる事となる。(中学校国語「解説」 p12)

○社会

(歴史的分野)

「社会的事象の歴史的な見方・考え方」については、……「社会的事象を、時期、推移などに注目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付けること」とし、考察、構想する際の「視点や方法(考え方)」として整理した。(中学校社会「解説」 p83)

(公民的分野)

「現代社会の見方・考え方」については、……「社会的事象を、政治、法、経済などに関わる多様な視点(概念や理論など)に注目して捉え、よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること」とし、考察、構想する際の「視点や方法(方法)」として整理した。(中学校社会「解説」 p126)

○数学

「数学的な見方・考え方」については、「事象を数量や図形及びそれらの関係などに注目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること」であると考えられる。数学の学習では、「数学的な見方・考え方」を働かせながら、知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して探究したりすることにより、生きて働く知識となり、技能の習熟・熟達につながるとともに、より広い領域や複雑な事象の問題を解決するための思考力、判断力、表現力等や、自らの学びを振り返って次の学びに向かおうとする力などが育成され、(中学校数学「解説」 p7)

○理科

理科における「見方(様々な諸事象を捉える各教科等ならではの視点)」については、理科を構成する領域ごとの特徴を見いだすことが可能であり、「エネルギー」を柱とする領域では、自然の事物・現象を主として量的・関係的な視点で捉えることが、「粒子」を柱とする領域では、自然の事物・現象を柱とする質的・実体的な視点で捉えることが、「生命」を柱とする領域では、生命に関する自然の事物・現象として共通性・多様性の視点で捉えることが、「地球」を柱とする領域では、地球や宇宙に関する自然の事物・現象を主として時間的・空間的な視点で捉えることが、それぞれの領域における特徴的な視点として整理することができる。(中学校理科「解説」 p11)

理科における「考え方」については、……探究の過程を通じた学習活動の中で、例えば、比較したり、関連付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えることとして整理することができる。なお、この「考え方」は、事物をどのように考えていくのかということであり、資質・能力としての思考力や態度とは異なることに留意が必要である。

(中学校理科「解説」 p12)

○音楽

音楽的な見方・考え方とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づく

っている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」(中学校音楽「解説」 p 10)

○美術

造形的な見方・考え方とは、美術の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値を作り出すことが考えられる。(中学校美術「解説」 p 10)

造形的な視点とは、造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点である。(中学校美術「解説」 p 10)

○保健体育

(体育分野)

「体育の見方・考え方」については、……「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果す役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・ささえる・知る』の多様な関わりと関連付けること」(中学校保健体育「解説」 p 25)

(保健分野)

「保健の見方・考え方」については、疾病や傷害を防止するとともに、生活の質や生きがいを重視した保健に関する観点を踏まえ、「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること」であると考えられる。(中学校保健体育「解説」 p 25)

○技術・家庭

(技術分野)

技術の見方・考え方を働かせとは、……「技術との関わりの視点で捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性などに着目して技術を最適化すること」(中学校技術・家庭「解説」 p 19)

(家庭分野)

生活の営みに係る見方・考え方を働かせとは、家庭分野が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することを示したものである。(中学校技術・家庭「解説」 p 62)

○外国語

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられる。(中学校外国語「解説」 p 10)